

第 11 回低温物質科学研究センター講演会・研究交流会開催報告

Report on LTM Center Workshop 11

佐々木豊

京都大学低温物質科学研究センター

Yutaka Sasaki

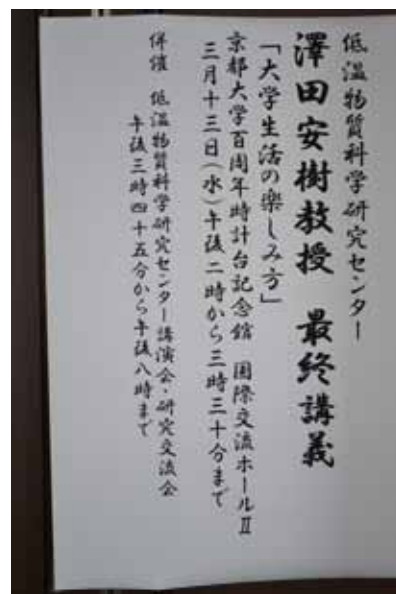
Research Center for Low Temperature and Materials Sciences, Kyoto University

Annual meeting of the researchers and students who were affiliated with LTM center was held on March 13, 2013 at Kyoto University Clock Tower Centennial Hall.

平成 25 年 3 月 13 日（金）に京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールに於いて、第 11 回低温物質科学研究センター講演会・研究交流会を開催致しました。本会は低温物質科学研究センター関係者が一堂に会して、招待者の講演を聴き、日頃の研究成果をポスター講演の形で披露したり、今後の研究計画や新たなコラボレーションについて議論をしたりと、文字通り研究交流を行なう場として開催しております。今年度はこれまで 7 年に渡って副センター長を務めていただいた澤田教授のみならず、3 期 5 年に渡ってセンターを率いて来られた前川センター長までも同時に定年退職をお迎えになるという、大きな節目を迎えることとなりました。発足以来専任教授の定年退職はこれで 3 人目となりましたが、とりわけ感慨深い年度末でありました。

講演会に先立ち、澤田教授による最終講義が開催されました。「大学生生活の楽しみ方」という魅力的な題目で、学生時代の出来事からセンター在籍中の出来事まで数々のお話と教訓を後進の者に残して下さいました。予定時間を大幅に超過する大熱演でしたが、超低温の世界を探求するために冷凍機を自作し、計測器を自作し、そして新しい物理の世界を探求してきた強者の、実績に裏付けられたお話に感銘を受けた若者も多くいたようです。

講演会では「低温科学の楽しみ方」をテーマに 3 名の講師より広範囲なお話を伺いまし



た。前川センター長からのご挨拶のあと、京都大学大学院理学研究科化学専攻教授の吉村一良氏より「金属の磁性とエキゾチック超伝導の最近の展開」という題目で、極めてスペクトルの広いお話を聞かせていただきました。次々と様々な物質が繰り広げる物理現象を解説していただき、物質科学の広範囲な広がりには驚きを覚えた方も多数おられたことと思います。



続いて、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻教授ならびに東京大学低温センター長の福山寛氏に講演をして戴きました。シンプルかつクリーンな物質であるヘリウムを極低温下で清浄なグラファイト表面に吸着させることにより実現した、理想的な2次元ヘリウム系において面密度に依存して変化する物質の姿について、お話を伺いました。ギャップレスの量子スピン液体状態の存在を初めて見いだしたことやその後の研究の発展について詳しく解説を受け、我々が何故に絶対零度近傍における低温科学の研究に邁進するのか、その気概を感じていただけた聴衆も多数いたのではないかと思います。



最後に、京都大学大学院人間・環境学研究科教授ならびに低温物質科学研究センター長の前川覚氏に講演をして戴きました。人間・



環境学研究科において行われた最終講義とは独立に、センター関係者に向けて最終講義を行っていただいたことにもなりますが、スピンプラストラーションのある系でおきる不思議な物理状態の観測を目指して、良質な物質系を準備する段階から様々な努力を重ねて研究を進められてきた歴史を語っていただけました。困難の中にこそ未来への活路があるのだというお言葉に、改めて気が引き締められる思いでありました。

お気づきの方がおられたかも知れませんが、本年度より4代目センター長に就任されました吉村氏を先頭にセンター長揃い踏みという趣向でした。講演会には現役の関係者のみならずOBの先生方もご参加下さり、総勢84名の参加者を得ました。予想通り(?)3氏とも大熱演のため質問時間が全く取れなくなってしまいましたことを世話人として深くお詫び申し上げます。

講演会の終了後、隣接する会場において研究交流会ならびに懇親会を行ないました。会場には定年退職を迎えられたお二人を祝福するポスターも掲示され、その前でセンター教職員一同より花束が贈呈され、また参加者一同の盛大な拍手によりお二人のこれまでの多大なる貢献に感謝を表明させていただきました。その後は、いろいろな研究分野の大学院生、研究員、教職員や学外

からの参加者も入り交じって懇親を深めながら、ポスターの前では熱心な研究討議が繰り広げられました。様々な分野の研究者による交流会は研究交流の幅を広げ、大学院生への教育効果という面でも大きな意義を持つものと考えています。今後ともに低温物質科学研究センターが学内外の低温物質科学研究者の核となり、研究者の自発的な意思による学問の融合・学際領域の開拓を図っていただけると願っております。

